

芥川だより

編集発行人 下村嘉明

発行所 着物から服を仕立てます 梵

高槻市芥川町2-14-3

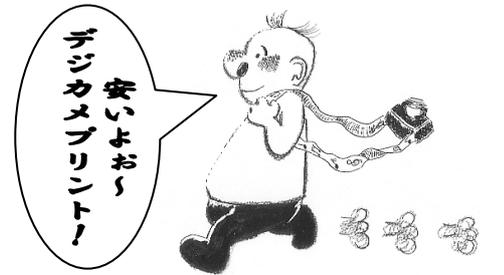
TEL072-681-8870

発行日/2007年4月20日

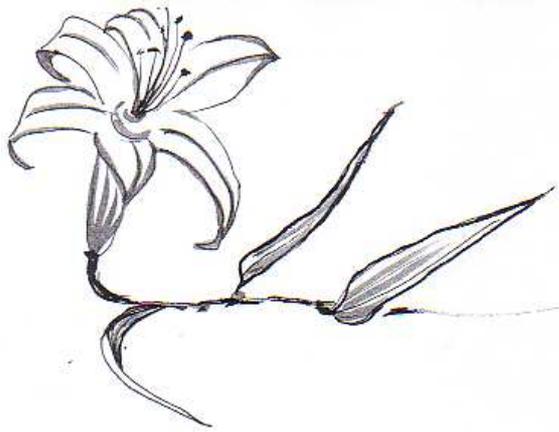
ご希望の方にはお送りします

お気軽にお問い合わせ下さい。

e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp



芥川の写真屋さん



笹ユリと猿

七つ年上の兄が大切に育てている笹ユリが、猿に荒らされた。十年前に家の裏山に咲いていた笹ユリに魅せられた兄は、それ以来、杉木を間伐し、下草を刈り込み、秋には種を採って乾燥させ山に蒔く、そういう気の長い作業を何年も繰り返してきた。種を蒔いてから芽が出るまでに三年もかかるらしい。その甲斐あって、今では160本の笹ユリが群れ咲くようになった。その大半が、昨年咲きそめる直前に猿の餌食となったのだ。兄によると、猿の被害は初めてだという。猿は花の下にある蜜に味をしめ、引き抜いてユリ根ごと食べてしまうそうだ。◆今年は、猿害を防ぐために山中に柵をめぐることを考えてるとか。しかし、猿は賢い。人目のない早朝や昼寝時に敵はやってくる。見張り役の猿が屋根や木にのぼって、甲高い声を発する。その声に促されるように十頭ほどがブラブラ歩いて山から下りてくる。母は「ユリの蜜や根は美味しいから、毎年この時期になれば来るわ」と素っ気ない。兄は何とかして猿の侵略を防ぎたいのである。◆これまでに100本以上増やした。60本は京都の有名な神社に寄贈して喜ばれてるらしい。神社の宮司さんが今年は見に来ると言う。兄曰く「これは道楽やなあ」。母曰く「そのうち田圃にも植えよるで」。村の猟師は「これほどの笹ユリが群生しているとはどこにもない」と感心する。今年も私もぜひ、裏山の一面に咲きほころぶ笹ユリを見たい。そのためにも猿の略奪を阻止せねば……。◆兄の増やした笹ユリが株分けされて、やがていろいろなところで子孫の花々が咲きこぼれ、人々の目を楽しませる、そんなことを想像しただけでも楽しい。京丹波町稲次が笹ユリのふるさととして知られる日がくるかもしれない。(嘉)

芥川商店街歳時記

今月の予定

- 4月29日(日) こいのぼりフェスタ1000第16回
- 5月3~4日 高槻ジャズストリート
- 第四回 楽の会 亀屋寄席(笑福亭 銀瓶) 割烹旅館 亀屋
5月27日(日曜日) 午前10時半開場。11時開演。会費、2500円、(お料理込み)
- フィナンシャル・プランナーによる保険見直し相談会(無料)
毎週土曜日・日曜日(要予約) 保険の身近な相談所・総合保険事務所 ☎0120-801-836

☆☆☆ 投稿記事 随時大募集!! ☆☆☆

深奥幽玄 手談の交わり

囲碁で豊かな人生を!

日本棋院高槻支部 **芥川囲碁サロン** (株)入谷商会経営

日本棋院 棋士 谷村義行八段による

大盤解説 毎月第二日曜日 午後2:30より

指導碁 毎月第二日曜日 午後4:00より

高槻市芥川町2-10-11(芥川商店街)

TEL・FAX 072-682-0403(代)

線路側を歩きながら、こちら辺りにつくしでもありそうなものだと、目を凝らしたが無い。

大きな枯れ草のあいまに青いものが見えた。「あつ、よもぎだ」。そーつとかくれるようにして鮮やかな緑色のよもぎに手をいれた。そして思い出した。季節がくると、姑とよもぎをつんで、蒸し、それを蒸したもち米に入れてつく。私が杵を振り上げ姑がまぜる。

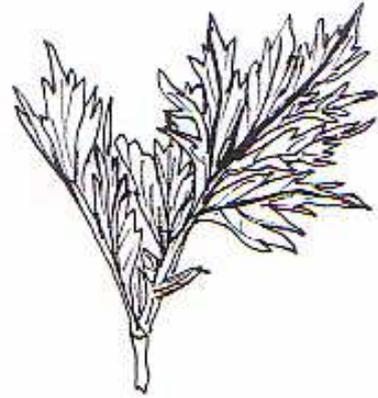
あんこの炊き方の難しかったこと。臼も杵も納屋で寝転がっている。自分だけ食べてみるよもぎ餅をいつかは作ってみようと思う。ミキサーがある、レンジがある、あんこは買ってくる、レンジがいい。色、香り、味を自分で作ってみたいと思っている。

緑色のよもぎ餅を想像していたら、新聞にこんな句が、
「夜は雨という草餅の草のいろ」
濃い緑で雨の気配を感じとったという。写真の草餅を見て思わずグーウー。

昔の日本人は季節に敏感という。私達の年代でも、それは言える。寒いうちから、木々の芽のふくらみ具合で身近に春を感じ、暑いうちにトンボが飛べば、もう秋か。雪んぼが舞い舞いすれば、もう冬か。

垣根の雪ノ下も元気よく伸びてい

る。もうすぐミキサーにかけられることも知らないで。それぞれの草木に生気を感じ、四季が身に迫ってくる。



親から子へ

こんな情報紙を作りたいのだけれど、と思い立ったままと聞かされた。

でも手順とか、コツがわからない。「ああ勉強しとくべきだったなあ」。教えてくれる人がいない。私の気性をしっかり把握してくれる人が。「自分がどんな最期を迎えたいか」「生まれた山里のこと」「親が自分にしてくれたこと」と。「好きなこと」「好きだった人」「日々の楽しみだったこと」「つらかったこと」どれも内緒にしておきたかった。でも書いておこうという気を起こさせてくれた人には感謝している。自分の子供が、孫が親の個人史として受け止めてくれる日も近い。

戦後の豊かさしか知らない世代と、太平洋戦争を体験したその親の世代、いろんな面でライフスタイルは大きく違う。親子でも、ゆつくり話も出来なかつた。それぞれの道をたどって家をあとに出てゆく子供達。

戦争を知らない子供たちに、物不足時代、細々とした生活、気持ちのゆれ、六十年たったからこそ、親子だからこそ話せる機会もあるだろうか。訪れてほしい。

戦争を体験した世代は、さまざまな日本の戦後の複雑さを感じた。ここには書ききれないことばかり、ノートをみるまでに至らなくても、子供たちとはゆつくり話をしてみたい。



誰かの背後

一日中家にいる。一日中テレビの前で、ゴロゴロしており、こちらが何を話しかけても生返事しかせず、不思議な人物。これといった趣味もなし。

絵や音楽などの芸術にも全く興味はなく、庭木の手入れ、私の飼っている金魚にすら関心を示さない人。

好きなこと、好きなものといえるのは、野球、プロレス、相撲、およそスポーツと名のつくものは全部好き。テレビの音量を上げて、迷惑なことこの上なし。

自己中心的で幼児的といえる。口数が少なく、暴力を振るうこともなかつたので、喧嘩は、いつも私の一方通行で終わった。

なるだけ外出をして、他人とのふれ合いを楽しむようにした。イライラしている自分の心を見せまいと……。

これが口実なのか、よく出かけた。ウーン、そういうものかも知れない。

子供達も、本当によく働いた父親の姿を少しでも知っていたら、「おやじ、おやじさん」と慕ってくれたかも知れない。わかっていても照れくさいのかも、と思う。

息子二人にとっては、父はやはり、人面の大岩ではなかるうか。

喜怒哀楽を表にださず、平凡で無口だけを看板にした男である。

親と子供、妻との家族の中で一生懸命に生きた背中を見て、私の人生は豊かになったと信じている。

冬の北海道・大雪山（1）

梵店主

劔岳・早月尾根において初めて経験した山岳部の合宿は、よっちゃんの胸に一生忘れることのできない強烈な思い出を刻み込んで、終わった。天候にも恵まれて年内に下山し、正月を京都で過ごすことができた。だが、よっちゃんはまだ正月気分に戻ってはいられなかった。二月の後期試験が終わった後すぐに春山合宿が控えているのだ。北海道・大雪山系の縦走——よっちゃんは北海道へ行ったことがない。緯度が高いのだから、寒さも一段と厳しいだろう。合宿の日が近づくにしたがって、不安もつのつていく。この合宿は冬の劔岳以上の凄まじい山行となった。

メンバーは三人、リーダーの三年生と二年生、そしてよっちゃんである。石狩岳から旭岳までスキーで縦走する計画である。よっちゃんにスキーを買う金なんかない。部屋の倉庫の奥から何年も眠っているようなスキー板とストックを取り出してきて、間に合わせる。スキー板は長さ二メートルを超え、しかも重い。登山靴をスキーに固定する金具のカンダハーをうまく調整できないが、まあ、何とかなるだろう。

食糧と装備をそろえ、準備万端整えて、出発の日を迎えた。食糧・装備を詰めこんでパンパンにふくらんだキスリングの重さは、五十キロ近くになった。部屋からキスリングを背負い、手にはスキー、ストック、ピッケルを持って歩きはじめたが、歩きにくいことこのうえない。何度も立ち止まって、スキーを持ちかえたり持ち方を工夫するが、うまくいかない。なんとか市電の停留所までたどり着く。京都の主要道路には路面電車が走り、市民の足としてバスよりも利用されている。この電車に乗り込むだけでも一苦労だ。荷物を積み終わったとき、よっちゃんの額から汗が流れていた。車内では置き場のないスキーとストックをかかえて、京都駅に向かう。

ときおり左右に激しく揺れる市電特有の揺れに身をまかせるとよっちゃんの身体は、湯気だっていた。暖房のよくきいた車内でよっちゃんは思う。電車の乗り降りにも苦労するのに、この先どうなるのだろうか。はるか北の大地は雪におおわれ何もかもが凍てついていることだろう、どのような試練が待ち受けているのだろうか、大雪山はどのような装いで三人を迎えてくれるのだろうか、よっちゃんの胸の中は不安でいっぱいになっていた。こんな苦労をして…命をけずるようなつらい思いを

してまでやる山登りって何だろう。京都駅から、大阪発青森行きの夜行急行「日本海」に乗る。駅には何人かの先輩たちが見送りに来ていた。ホームに入ってきた「日本海」に唾然とする。満員なのである。見送りの先輩たちの手も借りて、ザックやスキーをデツキに何とか積み上げた。が、三人のすわるスペースはない。デツキに立つたまま糸魚川まで辛抱しなければならなかった。

糸魚川で大系線に乗り換える客が大勢降りたおかげで、やっとイスにすわることができた。が、青森まではまだ遠い。

夜明け前、大館駅のだれもないプラットホームで、一人の先輩が待っていた。三人に大館の酒と珍味を差し入れるためだ。この、寒く暗いホームで私たちのためにわざわざやってきてくれた先輩を見て、その心遣いに、ありがたい、ほんとうに先輩というものはありがたい、とよっちゃんはしみじみ思った。

このK先輩は、十年前にアラスカ学術登山を実現させ、みごとに成功に導いた。三年前にはネパール・ヒマラヤのダウラギリI峰登山隊に参加し、登山隊員として活躍された。ダウラギリI峰は難攻不落の八千メートル峰といわれた難峰で、当時の登山界では登れ

ないだろうという予想が大半であったが、登頂に成功したのである。また後年、アラスカ以来胸にあたたためていたカムチャツカ登山計画が実現する。ちょうどソ連が崩壊する前年にソ連アカデミーと合同隊を組織し、隊長として学術登山を成功させた。

よっちゃんは、K先輩がカムチャツカ計画の打ち合わせで京都に来たおり、何度も会って酒を飲んだ。事業にも成功した先輩は「こんな商売じゃなくて、もっと大きなことをやれ」とよっちゃんを励ましていた。

カムチャツカ登山が成功した翌年、K先輩は癌を宣告された。一年はもたないだろうと診断されたのだ。先輩はそれでも希望を捨てず、いろいろな治療を試みた。だが、医師の予告どおり一年足らずで亡くなった。享年五十四であった。亡くなる前にわざわざよっちゃんを訪ねて、ずいぶんご馳走してくれたことがあった。そのときはまだ生きのびる希望を捨てていなかった。豪傑とやさしさを併せもったK先輩は、よっちゃんにとって先輩の中でもっとも好きな先輩、尊敬する先輩であった。先輩の訃報は全国紙に掲載され、秋田で営まれた葬儀には多くの山岳会員関係者が参列した。よっちゃんは、そのときにもらった秋田杉のワカンをも今も大事に使っている。

介護という行

毎朝五時過ぎに起き、飯の用意や雑用をすませて、六時から介護が始まる。

「おはよう」と声をかけ、天気や外の様子など他愛ないことを話しかけ、お袋の両腕を背伸びするように上に伸ばす。すると、結んだ唇をとがらせて「うー」という声を発しながら、起きがけのからだを目覚めさせるように自らも足を伸ばす。そのときの気持ちよさそうな顔はまるで赤ん坊だ。

食事前にROM (rang of motion) という手足の運動をする。日本語で関節可動域と訳されるが、ようするに手足腰の関節が硬くならないように伸ばしたり曲げたりする運動である。一度関節が固まってしまうと、もとはに戻らない。手足を曲げたまま固まったり、逆に伸びたまま固まってしまうと、オムツを替えたり、着替えさせたり、車いすに乗せるのにたいへん苦労する。いまのところお袋にその心配はない。この運動は二十分ほどかかり、一日三回、食前にやることにしている。

四肢の運動をしたあと、温めた栄養剤二五〇mlを、胃瘻チューブから点滴を落とす要領で一時間かけてゆっくり注入する。そのあと白湯を三〇〇cc入れる。これも一時間以上かかるので、

朝食の時間は二時間あまりということになる。そのあいだに自分の朝食も済ませる。昼は白湯を二〇〇ccにし、夜は栄養剤を半分減らす。一日約九四〇キロカロリー摂取し、水分は三食後のほかに三時に二〇〇cc補給する。入浴したときや発汗が多い日は量を増やさなくてはならない。夏はさらに午前一〇時にも水分補給する。

食事中に口の中を掃除する。口から喉の奥は雑菌が繁殖するのに絶好の環境である。できるだけ清潔にしておかなければならない。毒性の強い細菌が唾液とともに誤って肺にはいると、肺炎を引き起こす。昨年お袋が肺炎になった原因はこれだ。まず舌についた白い苔を専用ブラシで取り除く。次に下顎に残る七本の歯を磨き、最後にうがい薬をしみこませたブラシで口の中全体を掃除する。これを朝晩二回やる。

食事が終わって二十分ほどしてからオムツをみると、だいたい通じがある。当初もつとも難儀であったこの排泄は、いまや「よーし、やったね、かあちゃん」と拍手をもって迎えている。その処理を終えてようやく九時過ぎ、朝の作業が終わる。排便がない場合は、お腹をマッサージして腸を刺激する。しばらくして通じることもあるが、何回かくり返せば、だいたい翌朝には通じがある。便秘が三日続いた場合は朝

食前に坐薬を挿入する。

二、三時間おきに体位交換をしなければならぬ。オムツは一日六、七回取り替える。夜中にも一度起きてオムツと体位の交換をする。

こんな介護の実状を知って、人は同情を寄せたり励ましてくれる。たしかに介護はたいへんであるが、僕の場合には苦痛に感じたり、嫌嫌やっているわけではない。煩わしく感じるときはあるが、当たり前のご日常として受け入れている。

僕は四年前、介護という逃げようのない現実が迫ったとき、これは仏さんから課せられた行だと諦めた。必ず誰かがやらなければならない、行ならば手を抜かずにやろう、そういう構えで介護にあたることにした。では、何のための行なのか。

お釈迦さんは最初の説法のなかで、「四諦」という根本原理を説いた。つまり、この世は苦である(苦諦)、苦の原因は愛欲という執着にある(集諦)、この執着を断つことが悟りの世界である(滅諦)、そのために八正道という修行をしなければならぬ(道諦)、と説いた。悟りにいたるための八正道とは、清浄な生活をせよとか、邪念をおこすな、嘘をつくなどという八種の規範のような行であるが、とどのつまりは「セックスをしたらあかん」ということに

つきる。お釈迦さんは無理難題をおっしゃる。俺にはできない。

行にはいろいろな修法があつて、宗派によって異なる。比叡山の回峰行のような、死と隣り合わせの荒行もあれば、ただひたすら静かにすわる坐禅という行もある。そういう難行にたいして、南無阿彌陀仏と称えるだけで、阿彌陀さまの深い慈悲に導かれて極楽往生できるといふ易行もある。

僕は行に、悟りの境地に達したいと、浄土に往生したいという願いを込めているわけではない。お袋が健康を保ちながら自然に衰え、安らかに最期のときを迎えられればいい。肺炎を患って死期が早まることもあるかもしれないが、それはそれでやむをえない。そうならないようにできるだけ手をかけているだけだ。

いままでも罰当たりなことをしてきたし、これからもするだろう。そんな俺にたいして、一つくらい身に修ずることをやれ、という仏のお告げなのだろう、そう思って介護という行を修している。



おばちゃんデビュー

「大阪のおばちゃん」というもの、自分ではまだデビュー前やと思っっている。

カバンの中にはアメちゃんが入っているものの、ヒョウ柄グッズを持っていない。

…春スーパーの魚売場の前…

今年初めてのいかなごのくぎ煮を炊き、さて第二弾めという時。

ん？ 一キロ千四百八十円？ な、なにこの値段！？

前回は一キロ九百八十円やったやん、しかも毎年ほぼ九百八十円。

なのにこの値段は何や！？ 怒りと疑惑がフツフツと込み上げてくる。

たかがいかなご、されどいかなご、今しか入手できない旬というものの、

足元を見られてるのか、漁業組合の陰謀か…。

ボー然と売場に立ち尽くしていると、知らないおばちゃんが声をかけてくる。

「いかなごえらい高いね」そうなんですよと言わんばかりに。

おばちゃんも今年二度目に買いにきて、こんなことは前代未聞だともり上がり、そこに品だしにきた売場のお兄ちゃんに、何でこんな値段やねんと

詰寄る。

そこへまた別のおばちゃんが参加し、グーイングの輪が広がる。あかん、このままでは…これ以上輪が広がれば私はデビューしてしまう。

それはあかん、まだヒョウ柄が揃ってない…。

かくしていかなごは早々にあきらめその場を去ることにする。

その後売場に残ったおばちゃん二人はどうしたか知るよしもない。

！自分ではまだデビューしてないと思う。(YUN)

ツバメだより

私の家は新興住宅地にあるのですが、淀川の堤防に近く、周りにはまだ沢山の田んぼがあるせいか、毎年ツバメがやってきて巣作りをします。

中でも私の家はツバメ達には優良物件のようで、巣立っては壊し、巣立っては壊し、を繰り返して毎年のように住み着いてしまいます。

私は元々生き物は好きなのですが、一度巢の中で死んでしまったヒナから、大量のダニがわいてしまい、それが身体につき頭の中から顔へとモゾモゾ移動するのです。指でつぶそうと思っても指紋の中に入ってしまうくらい小さいダニで、鳥に寄生するので

人には危害がないらしいのですが、モゾモゾ感が不快なのでなるべくならツバメには遠慮していただきたいなあと思っていました。そんないきさつがあったからなのか、父は無慈悲に巣をたたき壊すのです。

ちよつと目を離れたスキにツバメが巣を作り、ちよつと目を離れたスキに父が巣を壊す。まるで「老人と海」ならぬ「老人とツバメ」です。

家は玄関とガレージが並んでいるのですが、去年玄関前にまた一つ巣ができました。ここなら車にもフンがかからないし、フンよけのダンボールも安定して置ける。

普通ツバメは四月中に巣を作ると二回卵を産んで子育てします。このときも時期が早かったので二回子育てするなと思ったのです。

さすがの非情の父も介護施設を出たり入ったりしていたので、もう巣を壊す心配もありません。ツバメは安心して子育てができるのです。

ところがツバメは一回しか卵を産まないでどこかへ行ってしまう。そして夏の盛りに父は亡くなりました。

そしたら又どこからかツバメがやってきて、今度はガレージのほうに巣を作り始めたのです。なんだツバメも二世帯住宅か、うちと一緒にね。なんだか

父がツバメになって帰ってきた気がしました。

毎年のことなのでツバメがいつ帰ってきているのか、あまり気には止めていませんでしたが、たしかGWの頃だったような気がして、今年は芥川だよりにツバメの話が書けないものかと空を見上げていたら、ナント今日三月三十日に帰ってきたではありませんか。

「おじいさん帰ってきたよ」

と早速母に報告したら、母も、

「えっ？ もう帰ってきたの？ 早く帰ってたかったのね」

と微笑んでいました。

もうすぐ又ヒナの生命力あふれるコーラスが聴かれます。(のん)



布施行

煩惱に目(まなこ)障(さ)へられて 撰
取の光明見へざれども 大悲ものうき
ことなく 常に我が身を照らすなり
父は朝、目をさますと、ときどきこの
親鸞さんの偈(げ)を口ずさんでいまし
た。これは親鸞上人が源信をたたえた詩
です。私は幼くて何のことやらわかりま
せん。お父さんの独り言だと思っていま
した。

姉が小学校から女学校へ進学する
とき、父は麹町にある浄土真宗の学校を選
んで、入学を決めました。「女の子は、将
来どんな宗旨の家庭に嫁ぐかわからない
から、どの家にも受け入れられるような
基本的な作法を身につけられる学校がい
い」という先生の勧めもあったのです。
私も姉と同じ女学校に進み、仏教精神に
基づいた礼儀作法を学び、教育を受けま
した。八人姉妹のうち四人がこの女学校
に通いました。私たちは学校時代は何と
も感じていませんでしたが、だんだん年
を重ねるにしたがって、女学校で学んだ
教えの有り難さが身にしみて、仏さまに
手を合わせて感謝しあっています。そん
な女学校で学んだお蔭なのか、四人の姉
妹はみな、私を筆頭にお念仏に縁のある
家に嫁ぎました。

私の家は、祖父の時代まで熱心な日蓮
宗だったので。日本仏教の祖師たちは
ほとんど都か都以西の出身ですが、日蓮
上人だけは関東、安房国のお方です。日
蓮宗の総本山は、日蓮さんが佐渡流罪後
に身を寄せた甲斐の身延山・久遠寺で
す。亡くなられたのは大田区の池上・本
門寺で、大本山になっていきます。幼い頃、
本門寺へよくお参りに連れて行っても
らいました。境内には、薄汚れた白い木
綿の甚平さんを引つ掛けた物乞いがた
くさんいました。石階の一段一段にすわ
って物乞いする姿を想い出します。強制
的に隔離されて行き場を失ったハンセ
ン病患者の方たちだったのです。子供心
にも胸が痛くなるような気の毒な姿だ
ったことを覚えていきます。あの人たちは
病気の苦しみだけでなく、たいへんな偏
見と差別のために言葉にいいつくせな
いほどの辛酸をなめていたのです。

当時結核などの病気が都会で蔓延し
ていて、看護婦不足が深刻になり、公募
がありました。ところが応募者が少な
く、私の通う女学校にも募集があったの
です。私は父に「こんなに大事に育てて
いただいて、いまの幸せを充分感謝して
いますが、私のこれからの一生をあの人
たちに奉げたい」と相談したことがあり
ます。父は「その気持ちはよく分かるけ
ど、うちにとつてあなたは大切な人で、
もしかしたら家を継いでもらわねばな
らぬかもしれない。だから、それだけ
は認めるわけにはゆかない」と眼に涙を
ためて許しませんでした。

父はお寺へ行くと、必ず私たちに、そ
の人たちにと五十銭包みを封を切つて渡
して、布施行をさせました。恵み施すと
いう布施は仏の教えの中でもたいせつな
修行徳目です。本門寺の境内で出会った
ハンセン病患者にたいする憐憫の情、そ
ういう人たちのために一生を捧げようと
した情熱、そんな感情がわき起こった若
かりし頃の私の心に、父の布施行の心遣
いがしみじみと伝わってきました。

いまは、行き場の失った病人がお寺で
物乞いをするということはありません
し、結核で死にいたるということもあり
ません。公衆衛生も医療技術も当時とは
くらべらようもないほどよくなっていま
すが、病気が否応なく、なる時はなるも
のです。健康な日常を過ごしてゆくには、
まず衛生面に気を配り、バランスのとれ
た食事を摂り、適度な運動をすること、
身体に障害のおきないように心がけるこ
とが大切であるとおつくづく思います。私
は七十五歳の時、心臓血栓、脳血栓で全
身麻痺になる寸前までいきました。まっ
すぐ歩けなくなつたにもかかわらず、最
初はあまり深刻に考えていませんでした
。病院にも行かずそのまま倒れていた
ら、もうこの世にはいなかったでしょう。
お医者さんが「よくまあ、ここまで来

られましたね」と驚かれています。そ
れから三週間は絶対安静で、朝昼晩と点
滴の毎日でした。生命をとりとめ、後は
治療と努力の甲斐あってだんだんと元の
元気な身体に戻っていききました。

健康を取りもどしても、自分の中では、
いっどこで倒れるかわからないという不
安があります。そんな私を周りの人たち
が気遣ってくれます。そういうあなたか
い眼差しに見守られて自分の身は生かさ
れていくんだということをつくづく感
じ、有り難く感謝しています。

残された生命を大切に慈しみ、自分で
できることは自分ですると自立宣言をし
て、何ごとも自分でやるという習慣を実
践しながら毎日を暮らしています。お陰
さまで、このあいだは二週間の旅行がで
きました。どうにか一人で、杖について
ですが、東京へ行つて姉や従妹に逢い、
いっしょに温泉旅行を楽しんだのです。



○真糺さん見事な写真不思議なり

○ファミリーの期待も乗せて発車する

○婆ちゃんの夢を叶えた孫いとし

読者からのたより

芥川だより読ませてもらっています。その度に、昔に返って思い出して懐かしく、Yさんのすばらしい文章読んで、文芸作家になれる人だなあ！とつくづく感心の至りです。

◇魚あれこれ◇

めばる(眼張)④ 周防 春日丸

魚も色々、グロテスクな魚から可愛く美しい魚、惚れ惚れするような魚もあれば、どうしても好きになれない、触るのも嫌な魚もいる。そんな魚のなかで、一番身近な魚はめばるである。めばるは早春の魚「春告魚」と言われるように旬は春。藤の花が咲く頃が一番美味しいと聞いたことがある。めばるは「眼張」と字を当てる。頭部の半分近くを占める位の、鈴を張ったような大きな目からこの名前が付いたように、視力がよく、動くものには敏感に反応し、自分から上にある物に興味

示し、いつも海面を向いているらしい。和歌山では「アオテンジョウ」と呼び、じつとしていたる時常に斜め上を向いていることから天(青天)を見ている魚ということである。

めばるの体色は、灰褐色(キンメバル、灰赤色(アカメバル)、黒灰色(クロメバル)の3種類があり、これは生息場所、海底の深さによりこの変化が出るのであって同種のものである。頭部にはカサゴ科の特徴である棘を持つ。眼下、頭の背面や眼前の他エラ蓋にもある。鱗も硬く多いので丁寧に取りなければならぬ。この時硬くて鋭いので注意が必要、うっかり刺すとしばらくの間ずきずきと痛むことになる。

めばるは魚では珍しく体内で受精して稚魚を産むのである。

ところで何故身近な魚かと言うと、釣りと言えればめばるである。ゼンゴ(小アジ)が波止場で釣れたりするがどうもサビキ釣りは得手が悪いのである。めばる釣りは子供の頃は父と今は夫とである。主に秋(10月頃)の夜釣りである。潮見表を確認、行くとすると餌の砂むし(ゴカイ)の確保。この砂むしが釣果に現れるわけであるから、なかなかいない大きく(太く)てよく動く元気な砂むしを探して一生懸命掘るのである。釣れる場所は決まっています、いざそのポイントへ。大潮、特に満月

の夜には当たりが悪く、干満で言えば上げの3〜8分がいいようで、潮が動かなくなると(潮止まり)今まで入れぐい状態でも全く当たりがなくなる。めばるは一番大きいものから釣れると言われている。最初に釣れためばるが小さければ大きい形のものあまり期待できないということになる。吟味した餌をつけて竿を投げる。ピクリともしない……電気ウキがすーっと沈む。「きた！」ぐっぐーと手応えがある。最高の気分である。やめられないわけである。

編集後記

芥川の桜堤も花見の人であふれ、ひと時の宴を楽しむ多くの人達が見られました。新緑の息吹が、五月の空に舞う鯉のぼりを待っているかのように感じられる。一〇号まで来ました。皆さんご支援ありがとうございます。(嘉)

ハイキングのお誘い

何人かの愛読者からやろうじゃないかと提案がありましたので、散歩から始めますので時間の都合のつく方は参加してください。

- 日時・五月十日(木) 十時、梵集合
- コース・芥川沿いに歩き、弁当を食べ帰ってきます。三時に梵に帰り、反省会をして解散する予定です。



高槻市芥川町2丁目24-5
ジョイライフマンション203号室
TEL 072-684-2220
お気軽にお問い合わせ下さい



冷えは万病のもと
健康は身体を温めることから
あなたは YOSA に座るだけ

YOSAPARK ののか

<http://yosa-nonoka.com/>